

人間と福祉における生きがいの考察

安藤 順一

Studies on Worthwhile Life in Human Beings and Welfare

Junichi ANDO

緒 言

G. Marcel は人間を〈旅する人〉と規定した。まことに人間は誰れでも、生から死への旅路をたどっている。旅路という言葉を知るとき、ペルシヤの詩人 Omar Khayyām の詩を思い出すにはいられない。彼は次のようにうたっている¹⁾。

／幾山河を越えてきたこの旅路であった。／どの地平のはてまでもめぐりめぐった。／
／だが向うから誰ひとり来るのに会わず、／道はただ行く道帰る旅人をみなかった。／

このように人生は、ただ1回限りのただ行くのみの道であり、再び帰ってくることはできない。それゆえ、古代からこの片道のみしか生きられない命とは何か、またその命をもった人間とは何か、の思索がなされてきた。しかしながら、現代社会の諸特徴の1つである高度機械化の傾向は、命と人間を考える余裕を奪ってしまった。この傾向に対する警告を A. Carrel はその著『人間—この未知なるもの—』のなかで述べている。人間、この未知なるものと A. Carrel がいうとき、その意味は、人間は本来不可知なものであるという意味ではなく、科学が人間を見分けがつかないほどに分裂させてしまったという意味である。次々と発明されていく機械文明の重圧、情報の氾濫、大衆と世論への埋没、また人間の唯物化によって、人間は巨大機械の構成分子となって自己の実存を失ってしまった。このような状況のなかで生まれてくるのが人間復興の叫びである。人間復興とは、巨大機械や社会機構に組みこまれた人間を救出することであり、具体的には、それは生きがいの追求となってあらわれる。

そして一方、現代社会の今ひとつの特徴である高齢化社会の深まりは、人間を否応なく死との対決に向かわしめる。高齢化社会とは65歳以上の高齢者が総人口の中で占める割合が7%以上を占める社会であるが、来る21世紀には20%を超え、平均年齢も現在の80歳をさらに数年延びるものと推定されている。しかし如何に寿命が延びたとしても、長い地球の歴史からいえば、それはほんの一点にすぎず、誰れでもいずれは死を迎えねばならない。そこで今後は、どのようにして死に対処していくかが大切な課題となってくる。今までは死を論ずることはタブーとされていたが、それではすまされなくなってきた。今やわれわれは、死と真向うことにより死にがいを見つけだし、死から生の意味を考えることが必要となってきた。このような立場での研究は死生学と呼ばれている。死生学とは、明日の確実な死との関わりにおいて今日をいかによりよく生きるかを考える学問である。このような意味で、生と死の意義を問いなおすことは現代のひとつの課題である。

ところで、わが国の高齢者自殺死亡率は、男 56.6、女 43.4 (65歳以上人口 10 万対、昭和 61

年度)で、各年齢層平均の自殺率、男 27.8、女 14.9 に比して著しく高くなっている。自殺の原因はさまざまであろうが、その根底には孤独感があるものと思われる。換言すれば、それは生きがいのなさに帰着する。そこでこの小論では、特に生きがいを取りあげ、①生きがいとは何か、②高齢者における生きがい、③福祉における生きがい、について考察しようとした。

生きがいとは何か

生きがいとは何かについて、深い省察のもとに書かれている代表的な書物は、神谷美恵子女史の『生きがいについて』である。周知のように神谷女史は、国立療養所長島愛生園の癩患者の治療にあたっておられた医師であり、患者の半数近くが未来になんの希望も目標も持たないという事実刺激されて、生きがいを感じさせるものは何か、生きがいを失った者が新しい生きがいを見出すのは何であるか、を研究された、それが本書である。

神谷女史は、生きがいとは次の欲求がみたされることであるといわれる²⁾。

①生存充実感への欲求 これは生きがい感の基本的要素の1つであり、具体的にはスポーツ、趣味的活動をすること、また日常生活のささやかなよろこび、たとえば花の美しさに魅せられる心、それをいつくしむ心に生命の充実感を覚えること、などである。

②変化への欲求 これは変化のない退屈性からのがれたいという欲求である。具体的には学問や旅行、登山をしたり、新しい流行を追うことである。また、このような外的行動だけでなく、じっと眺めこまかく感じとる心、つまり精神世界が豊かで、その世界での活動が活発であるときにも変化への欲求はみたされる。

③未来性への欲求 これは、これからの生活が新しい発展をもたらすであろうという期待と希望への欲求である。具体的には未来の生活目標が達成されること、また社会的、政治的、宗教的理想をもち、理想に向かって実践しうることである。

④反響への欲求 これは他者との共同の世界のなかで生き、他者との共感や友情をもつこと、また愛の交流をとおして他者から尊敬や名誉をうけることへの欲求である。

⑤自由への欲求 これは高い木の上の小鳥のように、自分からどこへでもとんでいけるような主体性、自立性の感情をもちたいという欲求である。人間は運命論的、決定論的状态にある存在でなく、自己が選択した方向に歩みうる存在である。もちろん、これには責任が伴う。

⑥自己実現への欲求 これは自己の内部にひそんでいる可能性を発揮して自己を伸ばしたいという欲求であり、具体的には創造のよろこびであり、可能性の内容と発揮の方法が自己の生きがいを決定する。

⑦意味と価値への欲求 これは自分の生きることに意味や価値を感じたいという欲求である。自己の生存の意味や価値の自覚は仕事のうえでの使命感となってあらわれる。

神谷女史のいわれるこの7つの欲求のなかで、最も重要なものは⑦と⑥の欲求であると思う。その理由は次のようである。すなわち、生きがいがあるという状態には、まず自分の生と存在に対し、意味と価値を感じとっていることが必要である。そしてその意味と価値を感じとっているとき、人間は使命感にもえ、その意味と価値を実現しようとする。これが自己実現への欲求である。神谷女史も「自己の生存の目標をはっきりと自覚し、自分の生きている必要を確信し、その目標に向かって全力をそそいで歩いているひと、いいかえれば使命感に生きるひとが一番生きがいを感じず人種である」(同書 30 頁)といわれる。

このことは、生きがいの相(すがた)を自己実現とみ、その自己実現を可能ならしめるものが意味と価値の自覚であるということである。意味と価値を重視するのは V. E. Frankl の

Logotherapy への思いがあったからである。周知のように、Logotherapy は第2次世界大戦中、300万のユダヤ人が殺害されたというあのアウシュヴィツ強制収容所における Frankl の恐怖と苦悩の体験から生みだされた療法で、意味療法といわれるものである。1日に1万人がガス室で殺されたという強制収容所、また苛酷な労働と飢餓のなかで多くの人びとが死んでいった日々、このような状況のなかで最後まで生きのびた人は、困苦に耐えうるつよい身体をもった若者ではなく、じつに存在そのものの価値、生存の意味を自覚した人たちであった。すなわち、戦争はいずれは終わる。そうしたら家族にも会うことができる。また好きな仕事に没頭することができるという思いをもった人たちである。つまりこの人びとは、生きること自体に意味を見出していた人びとであった。このような体験から Logotherapy は生まれている。

Frankl は書いている。「個人心理学は神経症的な人間の中に、ただいわゆる劣等感に悩む人間のみをみるのであって、その実存の無意味性の感情に悩む人間を見落としている。すなわち、自分がより劣った価値しかもたないことに悩む人間を見落としている。人間は劣等感によって心理的に病むばかりでなく、また無意味によっても病むものである³⁾、と。人間はときとして、平穩無事な生活を送っているために真剣に自分の生きることについて考えることをしない。ここでは自己実現の意欲も失われてしまう。自己実現を可能にするためには、自己の存在の意味が自覚されていなければならない。意味と価値への欲求を生きがいの最も根底に考えたのはそのためである。

ところで、このように生存の意味の自覚を生きがいの根底におくとき、われわれはこの自覚がなければ生きがい生まれえないかのような錯覚をもってしまう。しかしながら、生存の自覚にまだ至らなくても、われわれは生きがいをもつことができる。たとえば好きな趣味活動にわれを忘れているときも生きがいは生まれる。そしてその活動から、自己自身の人生にとっての使命感を感知することもできる。この立場での生きがいの特色は、生きがいが一般的・日常的生活のなかで求められることである。たとえば「あなたはどんなことに生きがいを感じますか」と学生に尋ねるとき、「知識が深まること」、「毎日友だちに会って話しができること」、「家が経済的に困っていないこと」などの答えが返ってくる。学生の回答をまとめてみると、①学校生活、②家庭生活、③経済関係、④人間関係、⑤生活の enjoyment、⑥就職、などに分けることができ、すべて身近かな問題に生きがいを感じている。

広辞林では、生きがいは「生きているはりあい、生きるしあわせや意義を感じる」と示されているが、そこでは感覚的な快楽から、職業、財産、趣味での満足、社会的な奉仕まで、すべてここに入ることになる。人生に固有の意味を見出し、自己実現をめざす生きがいを一義的な生きがいとするならば、このような生きがいは二義的な生きがいである。

一般に生きがいを論ずるとき、この二義的な生きがいが問題にされることが多い。もちろん、これも無意義なことではない。しかし人間として成長しようとするとき、自己実現をめざす一義的な生きがいに達することが必要である。このためには、自己実現とは何か次問われなければならない。

自己実現をめざすものとしての人間

H. Hesse は作品『데미アン』のなかで、「すべての人間の生活は、自己自身への道であり、一つのささやかな道の暗示である。どんな人もかつて完全に彼自身ではなかった。しかしめいめいは自己自身になろうと努めている。ある人はもうろうと、ある人はより明るく⁴⁾」と書いている。まことに人間の一生は自己自身への道であり、各々の力に応じて自我の確立をめざして

歩みゆく道程である。事実、『デミアン』は真実の自我を求めて苦悩する人間の物語りであるが、この自我の確立への道は、じつは生きがいを求める道であり、究極的には自己実現への道である。

それでは、自我の確立とは何か、これを簡潔に言えば、それは「自己の固有のものが、自己において統合され、さらに現実と他者の調和のなかで、その固有なものを発揮する能力をもつことである」と考える。固有なものとは自己が潜在的にもっている本来の可能性のことであり、それが発揮しうる根底には、自己肯定感情、現実認知、他者に対する親密性と敬愛がある。自己実現について、A. Maslow は「自己の才能、能力、可能性の使用と開発であり、使用と開発が可能なのは自分の資質を十分に発揮し、なしうる最大限のことをしている」⁹⁾ という。それでは、具体的に自己実現をとげつつある人はどのような人であろうか。これについて上田吉一氏は次のように指摘されている¹⁰⁾。

①自己実現をとげつつある人間は、すべての経験に開かれている。経験に開かれているとは、自分に不都合な経験や自己概念に一致しない経験に対し防衛的な態度をとったり、拒否したりしないで、むしろ旺盛な好奇心や探究心をもって、事実をありのままにとらえようとするものである。そこには自己肯定感と他者への積極的関心がみられる。

②自己実現をとげつつある人間は、ものごとくに没頭し我を忘れるという特徴をもっている。これはひとつの課題のなかに自己を没入させ、課題に魅了され、自己が課題と融合し、課題遂行に熱中することである。そこには恍惚感というべき至高体験がある。

③自己実現のみられる人間は、価値実現に対する強力な欲求をもつ。これは自己の利害を超えた普遍的な価値の存在を認め、それに近づこうとすることである。たとえば、学者は真理を価値あるものとし、教育者は善を追求し、芸術家は美を追求する。法律家は正義の普及を信条とする。そして各々それに近づく努力をすることである。そこには、真、善、美、正義など価値観の相違はあるにしても、たえずその価値を追求する内部からの衝動をもっている。それは価値実現へのつよい志向である。そしてその背景に自我の確立があるとき、自己実現はより強力になる。

このように考えれば、自己実現は生きがいの究極的な姿としてたちあらわれてくる。すなわち、自己実現は単なる生存の充実にとどまらず、本質的な自我との関連において、真、善、美、正義などの高次元の価値を実現するものである。それは単に生きるのではなく、善く生きることがを意味する。このことは、人間は自我の周近的末梢的な欲求を満足させるだけの存在でなく、自己の本質において生きようとする存在であることを示すものである。このことは重要なことと思われる。

高齢者における生きがい

ここでいう老いは年齢的な区分ではない。なぜなら、老いには個人差が大きいからである。したがって、社会の第一線で活躍している人は何歳であろうと老いと呼ぶべきではないと思う。それゆえここでいう老いとは、社会の第一線から退いた人びとのことである。

ところで、老いは今まで身体の衰え、記憶力の減退、疾病の多発など minus の image で受けとめられることが多かった。果たしてそうであろうか。われわれが minus の image で受けとめていたものは「老化」であり、「老い」ではない。老いは、人間1人びとが長い人生のなかで作り上げられてきた心のかげやきである。そして老いを生きる時期は次のような特色をもっていると思う。

- ①老いの時期は、人間が人間になろうとする時期である。
- ②老いの時期は、自己のいのちを祝福しながら、出会いを楽しむ時期である。
- ③老いの時期は、人生の意味深さを伝える時期である。

①の人間が人間になるとは、どういうことであるのか。これは自己が本来の自己となることである。いうまでもなく、これは老いに至るまでの人生が本来の自己ではなかったという意味ではない。これまでも与えられた自己の仕事をとおして精一ぱいやってきた。そして老いの時期も精一ぱい生きることには変わりがないが、本来の自己とは、自己の人生は他の誰れのものでもなく、自己自身が責任をもって、自己の生き方で歩いていく時期だということである。

このような立場で生きた人に一休禅師がある。周知のように一休禅師は、風狂三昧、淫犯・肉食・破壊の者と非難されながら、自由闊達のうちにその生涯を終えた。いうまでもなく、その自由闊達は勝手気ままという意味ではない。これは禅の厳しい修業を経た上で得た、何物にも拘束されない人間尊重と解放の境地を求めたための自由闊達なのである。そして特にその晩年は、盲目の美人、森女を得て、一休禅師のいのちは再び花ひらく。

この間の事情は禅師の著『狂雲集』の詩にうかがうことができる。特に次の、／持戒は驢となり破戒は人となる／河沙の異号精神を弄す／初生の子婚姻の線／開落百花幾度の春／の詩では自由闊達の意味を知ることができる。この詩の本意は、戒律に縛られるものは来世は驢馬に生まれる。本当の人間は戒律を体験したうえで、これを超えるところにあるということである。つまり、戒律にわずらわされる人間ではなく、人間的な自由を愛する天衣無縫の生き方をよしとするのである。しかしながら、禅師は風狂三昧のみに生きた人ではない。禅師は81歳のとき大徳寺第48世の住持となり、伽藍再興に88歳入寂の年まで盡力された。伽藍はその年に完成する。禅師の老いは、人間の真実を求めながら人間としての自己の生き方を生きることであった。

②の自己のいのちを祝福しながら出会いを楽しむ、とはどういうことであろうか。これは今まで生きてきたこと、また生かされてきたことへの感謝の思いである。この思いのあるとき、人間は他者をうやまい、自己の行いをつつしむことができる。そして、この思いのなかで人間は自己の生の意味を知ることができると思う。「意味は人生への食欲——すなわち生への意志を旺盛にする。(中略)世界への有意味性の感覚が深くなる程に意志は力強く持続性をうることができる」⁷⁾、とC. Wilsonがいうように、生の意味を自覚して老いを生きる人は、自己の殻に閉じ込める人ではなく、現実を受容し、現在の人生に対し積極的な態度で望む開かれた人となる。このような人はまた未来志向的であり、自己が出あうすべてのものに一期一会のよろこびを感じることのできる人であり、老いの時期の特色はここにあると思う。

③の人生の意味深さを伝えるとは、たとえ寂寥感や憂愁に襲われようとも、人生は生涯生きるに値するものであるという肯定的な生き方を示すことである。なぜなら、高齢者は人生の荒波を超え、人生の喜びや哀しみを体得した人であるから、その生き方を他人に示すことである。これは興味にしたがって学習をすることでもよい。真実と素朴に生きることでもよいと思う。

以上、老いの時期の役割を述べたが、このような役割が果たされるためには、高齢者1人ひとりが生きがいをもたねばならない。これについて筆者は、長寿村で知られる桐原(ゆずりはら)の長寿老人を対象に「どんなときに心のはりあいを感じますか」などの問診を行い、その傾向を調査した。次にその結果から生きがいの内容を考えてみたい。

この村は、山梨県北都留郡上野原町より約4キロの奥地にあり、桐原とは山の斜面に散在する8つの部落を総称した名前である。筆者は数年来、桐原長寿老人総合研究班の心理部門担当

の一員として参加しているが、この村の長寿率(ここでは日本人の平均年齢 80 歳以上の高齢者が 65 歳以上の高齢者人口の中で占める比率で考える)は 16.6%、全国平均の約 2 倍。しかも皆健康で知的能力も高く(長谷川式知能検査による)、恍惚老人は全くない。このため村全体は明るく陰惨さも全くない。長寿の原因は、麦を中心とした穀類、いも、豆類、緑黄野菜を中心とした食生活、また畑仕事にも山の急斜面を往来しなければならない生活環境が足腰をつよくし、健康体をつくっているとみられる。足の裏をビストスコープで撮影された玉川大学野田雄二氏は、長寿老人の足裏はツルツルして脂ぎっている。きれいなアーチを描いた見事な土ふまずが形成されている、鼻緒のついた履物を好む点を指摘される。それでは心理的にはどのようなことがいえるのであろうか。Rorschach test と問診の結果をまとめると次のことがうかがえた。

①家族は 3 世代・4 世代の人が多く、世代数の如何にかかわらず、長寿者は家長としての地位を保っている。また、家族から大事にされ、自分の意見を自由に表現でき、愛する孫や曾孫がいる。

②健康であるために山仕事、畑仕事ができ、里芋、馬鈴薯など四季の野菜も豊富にとれ、太陽とともに働く。また近隣の人たちと心おきなく仕事の話、ゲートボールなどの話しができる。

③長寿者の多くは、自己肯定的現実吟味がよく、内向型。また他人には親切であり、他人の期待に応え、他者への信頼感情も深い。さらに地域共同体への協働によるこびをもっている。

④肉体的な衰えは認めるが、それによって老醜、無用、気がねなどの感情をもたず、つねに明るくユーモアがあり、死への恐怖は少ない。また自然のままに、自己を超えた自然とともに生きようという姿勢、がうかがえる。

以上のことを考え、それぞれの本質をあらわすものとして、①は心の絆、②は仕事・余暇活動、③は奉仕、④は宗教的心情、といえるのではないかと思う。この桐原長寿老人の心理傾向を一般の高齢者にあてはめれば次のように考えられる。①心の絆とは、愛する人、愛される人があること、愛するものがあることである。入院中の臨死患者が家族のもとに帰って死にたいと思うのは、愛する家族、愛する部屋の中で命の終焉を迎えたいという心情からであろう。②仕事とは、社会との連ながりがあるということである。健康で活力があれば、パートの仕事であっても社会に役立ちたい、さらに新しい仕事、新しい仲間と出会って喜びと楽しみをもちたいということである。また余暇活動とは、定年後仕事をもたない場合、余暇時間を活用し趣味や軽いスポーツ、さらに生涯活動として主体的にとり組めるものをもつことである。余暇活動の充実は生きがいを生む。③奉仕とは、仕事や余暇と無関係でなく、その仕事や余暇活動が社会奉仕となることである。それは早朝広場に集まって体操をし、おしゃべりをし、ついでに広場を掃除することでもよい。また独居老人を訪ね慰めることでもよい。人間は自分がなお他者の役に立っているという思いのあるとき、大きなよろこびをもつことができるが、community 活動のひろがり生きがいをもたらすと思う。それでは、病床にあって奉仕活動のできない人はどうするか、そこにもじつは、V. Frankl のいう態度的価値のあることを忘れてはならない。態度的価値とは、自己の存在を受け入れ、苦悩にあってでもそれに耐え、生きようとすることである。極端な例でいえば、癌の苦しみに耐えるという苦しい事態にあってでも積極的にそれを受け入れることである。そこにその人の本当の姿、意義、価値があらわれてくる。老いの尊さはその人なりの心を残すことができることである。ところで、④老いの 3 つの役割を果たすことができるためには、宇宙を支えるものへの思いがなければならない。それは自己を超えたものの恩寵によって自分は生かされているという感謝の念とやさしさの心をもつことである。やさしさの心とは自他を包みこむ心である。これには 2 つのものがある。ひとつは信仰心である。

この心は神や仏への信仰心である。他は「自然なるもの」への帰順である。自然なるものへの帰順とは、すべてのものは自然の法則によって生を得、生き長らえ、そして死んでいくということは避けられないものであるから、自然のままに精一ぱい生きようとする心である。これは一種の自然への宗教的心情である。

この特色は両者とも、生死を超えたところに生きがいを求めようとすることである。前者は絶対的なものへの帰依によって新たな生を生きようとする。仏教やキリスト教がそれである。

「たとい私たちの外なる人は滅びても、内なる人は日々新たにされています」(コリント人への第IIの手紙5章16節)の聖句のように、肉体は衰えても、神の愛によって新たな生命を得、永遠の栄光を与えられることである。後者は、気ばらないやわらかな心で生きることである。さきに生きがいとは何かを問いながら、意味や自己実現の重要さを述べた。自然そのものへ帰順する生き方とは、意味や自己実現というものを超越したところに生まれる生き方である。

老子が「万物の自然を輔けて、敢えて為さず」(『老子』64章)、「我は愚人の心かな。沌沌たり、俗人は昭昭たり。我は独り昏きがごとし。我は独り悶悶たり。」(同20章)というように、万物の自然をたすけて、あえて作為をせず、生きることの苦悩を昇華した淡々として生きる生き方である。老いの偉大さと尊さは、まさにそういう生き方のできるところにある。そして、この生き方もまた老いの生きがいであると思う。

福祉における生きがい

(1) 福祉的生きがいの特徴

生きがいは、その人の歩んできた人生、職業、性格、性差、生きている環境の相違によって異なり、また年齢差によっても異なるきわめて個人的色彩のつよいものであるが、その中で一貫して流れるものが神谷女史のいわゆる7つの欲求であった。

ところで福祉における生きがいには、特に①他者のために全力を尽くすこと、②困苦を1つひとつのり超えることに大きなよろこびを感じる、ことであると思う。①は単なる奉仕でなく、それは自己犠牲を伴う愛他の精神である。②は物質的、精神的飢餓の状態に耐え、それをのり超えることにより歓喜(生きがい)を覚える、ことである。すなわち、福祉には「愛他、つまり人間愛」と「忍耐と克己の精神」が必要だということである。後者はV. Franklがいうように、人間は苦悩をひき受けることによって自らが成長する存在であるという自覚である。福祉の先駆者たちはみなこの精神を貫いた人たちであった。その一例として留岡幸助をあげることができる。いま、高瀬善雄氏の著『一路白頭=到ル』を参考にして述べれば次のようである。

周知のように、留岡幸助は北海道遠軽の地に、非行少年のための家庭学校を設立した人である。遠軽はオホーツク海まであと20キロという北端の地にある。家庭学校は最初東京府下北多摩郡巢鴨村に、明治32年(1899年)につくられた。当時の巢鴨は密林に包われており、けやき林、栗林のなかに山あり坂ありで、自然に恵まれた地であった。最初の生徒はたった1人であった。それが大正2年には237人に達する。留岡の信念は「人は地を開き、地は人を開く」ということであり、大地を踏んで行う労作教育を目ざしていた。入学者の増加と労作教育を発展させるため、留岡にはより広い土地が必要となった。そしてみつけたのが、かつて北海道一周の旅の折通り過ぎたことのある遠軽の地1000町歩であった。遠軽のきびしい大自然は人間を育ててくれる。なぜならそれは母なる大地だからである。この思いは留岡をして北海道家庭学校をつくらしめるに至る。これは現在の教護院の先駆となった施設であるが、それまでに至る留岡の労苦は並大抵ではなかった。

留岡幸助は元治元年(1864年)岡山県高梁に生まれている。父は吉田万吉、母はトメ、子だくさんであったため、米屋の留岡家の養子となった。8歳のとき寺子屋からの帰り道、士族の子と口論、木刀でなぐりかかる相手の手にかぶりつき怪我をさせた。それが原因で父親は出入りを差し止められてしまう。激怒した父は不理尽にも幼い幸助をなぐり倒してしまう。このことは留岡の心に身分的差別への怒りと反骨精神をうえつけたに違いない。留岡が17歳のとき、「この宇宙には神がある。士族の魂も町人の魂も赤裸々になって神の前に出るときには、同じ価値をもっている」との説教をきいて洗礼を受けたのも、この体験と無関係とは思われない。22歳のとき留岡は同志社大学に入学。在学中、人間社会の2つの暗黒面——その1つは遊廓、他は監獄——を知るが、彼はキリスト教の光でこの暗黒の世界を照らそうと考える。そして、「ジョン・ハワード及び欧州監獄界」を読み、2つのうち監獄改良にあたる決心をする。

同志社大学卒業後、留岡は伝導に従事。ついで北海道空知集治監教諭師となる。その間に彼は北海道一周の旅をしている。馬の旅が多かった。監獄研究のためのアメリカ留学。夏子夫人の死、貧民学校設立に奔走など、彼にとっては困苦の連続であった。その過程のなかで、彼は犯罪者となる原因が少年時代の家庭の乱れにあることを知るに及び、家庭にして学校、学校にして家庭である施設をつくらうとした。そして、つくられたのが家庭学校である。

留岡幸助の一生は「人間愛」と「忍耐と克己」によって貫かれている。暴力をふるう少年、学校を脱走する少年、どんな仕事をいいつけても動こうとしない少年など、どの少年にも彼は忍耐でもってあたった。「口で教えるだけでなく、身をもって教えよ」が留岡の信条であった。家庭学校では、校長も教師も生徒も区別がなかった。1人ひとりの少年が如何にすれば救われるかを考え、マキ割り、農作業、大工仕事など、さまざまな労作業を共にした、人から愚かといわれようと、時代おくれといわれようと、彼は非行少年たちの力になろうと決意し、生涯それを貫いた。まさに一路白頭に到る道であった。筆者はかつて北海道家庭学校を見学させていただいたことがあった。そのとき校庭にたてられた、この偉大な先覚者の胸像と『一路到白頭』の座右の銘碑を目のあたりにした感激は、いまでも忘れられない。福祉は小手先の仕事ではなく、人格と人格の結合のなかから生まれるものである。

(2) 福祉政策としての生きがい

老後の生活は平均して20年に近い。この年月を生きがいをもって主体的に生きるには国家的な立場からの施策がなければならない。なぜなら、急激な長寿社会への転換は、健康で自主的な高齢者がどのように生きてらよいかの生活モデルがないままの転換であるため、高齢者はどのように生きてらよいかわからないからである。

ところで、老人福祉政策は大きく3つの部門に分けることができる。それは、(A)健康で安定した生活を援助する部門、(B)在宅生活の援助と施設ケアの部門、(C)生きがいと社会参加の部門、である。そして、(A)部門では①健康づくりの推進、②経済的基盤安定の政策、(B)部門では①在宅福祉の充実、②住宅の確保、③施設整備の推進の政策、また、(C)部門では①学習機会の充実、②能力の活用と就業の場の確保、③社会参加の機会の拡大などの政策が含まれる。

ここで問題にしようとするのは(C)の部門である。この部門は高齢者が生きがいをもって生活を送ることができるよう、学習機会の充実や就業の確保につとめるとともに、地域におけるさまざまな活動へ積極的に参加できる条件の整備をはかることをねらいとする。名古屋市の政策を例にとれば⁸⁾、まず(C)の①学習機会の充実に関しては、高齢者の学習意欲にこたえるため、老年大学をはじめとする学習機会の充実につとめる。(C)の②能力の活用と就業の場の確保に関しては、高齢者の介護需要に対応し、福祉従事者を養成する。就業希望の高齢者に技能訓練、就業

援助を行う。またシルバー人材センターの充実をはかり、臨時的、短期的就業の場を提供する。(C)の③社会参加の機会の拡大に関しては、シルバーボランティア活動の促進、友愛訪問活動の充実、文化、趣味活動への参加促進、老人クラブ活動の振興、社会参加をしやすくするための敬老特別乗車券制度などの政策が推進されている。

ところで、高齢者の生きがい対策は、全国的に昭和50年以降変化がみえはじめている。すなわち、これまでの老人クラブ、趣味、旅行などへの援助をとおして高齢者の疎外感をなくし、生きがいを高めようということから、老人の能力を社会的に有用化させることを社会参加活動と考えるようになった⁹⁾。そしてその傾向は、昭和60年以降よりつよくなる。たとえばこの年度から、「老人クラブ助成事業」と「生きがいと創造の事業」(昭和54年度より開始、60歳以上の高齢者で、木工、園芸、手芸、木彫などの生産の場を提供し、創造のよろこびと生きがいを見出さそうとする事業)とを「老人クラブ活動等社会参加促進事業」に統合し、地域社会における社会奉仕活動または創造的活動に積極的に参加させようとするのもそのあらわれである。すなわち、これは老いを生きる時期が救いを待つ時期でなく、新しい自己実現のよろこびの時期でなければならないこと。また、老いの時期は個性豊かな生きがいをもって生きる時期でなければならないことを意味するものと思う。

結 語

現代のように複雑な、そして identity のもちにくい社会にあっては、生きがいとは何かを探究することは意義のあることである。特に社会の第一線を退いたあとの高齢者の生き方は、老いの時期が人生の完成期であるだけに、きわめて大事なことだと思う。

老人福祉法では「老人は多年にわたり社会の進展に寄与してきた者として敬愛され、かつ健全で安らかな生活を保障されるものとす」(第2条)という基本理念が示されているが、今日の高齢者は社会の進展に寄与してきた者という過去形ではなく、現在もなお社会の進展に寄与しつつある者である。それゆえ、つねに視点を community に向け、そこでの活動に生きがいを見出すことは、長寿社会の深まっていく現状ではきわめて大切なことである。ところで、それが可能であるためには政策として与えられる生きがい対策も必要であるが、自己の内から求め、あふれでる生きがいではなければならない。

袖井孝子女史は次のようにいわれる¹⁰⁾。①高齢期に必要なのは生計を維持するための職業ではなく、自己実現や生活満足を可能にする役割である。②職業生活からの引退は、必ずしも社会関係からの引退を意味しない。自分が遂行すべき役割を保持していれば、モラルや生活満足は低下しない。③そのための役割は、余暇活動、学習活動、市民活動、奉仕活動、自己実現のための活動である。④現代の社会では退職後の活動は、退職前の社会的、経済的地位によって規定される。すなわち、退職前に活動的であった者ほど退職後も果たすべき役割が多い。この④に関連して、筆者は、⑤老いの生活を決定するものは、退職前の職業生活の時代から、与えられる仕事に意味を感じ精一ぱい努力することに左右される、ということをつけ加えたい。なぜならば、老いの時期を生きがいをもって生きるには、現在の生が充実していなければならないからである。

引 用 文 献

- 1) O. Khayyām 小川亮作訳 1987 ルバイヤート 岩波書店
- 2) 神谷美恵子 1977 生きがいについて みすず書房

- 3) V. E. Frankl 宮本忠雄訳 1976 神経症II みすず書房
- 4) H. Hesse 高橋健二訳 1988 デミアン 新潮社
- 5) F. G. Goble 小口忠彦訳 1977 マズローの心理学 産業能率大学出版部
- 6) 上田吉一 1977 自己実現の教育 黎明書房
- 7) C. Wilson 由良君美訳 1979 至高体験 河出書房
- 8) 名古屋市高齢化対策連絡協議会 1985 なごやかライフ 80 名古屋市
- 9) 原田正二 1988 シルバー・コミュニティ論 ミネルヴァ書房
- 10) 袖井孝子 1976 老年期の労働 長谷川和夫・那須宗一(編)『老年学』 岩崎学術出版社